

細井広沢の竹枝

宮崎, 修多
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10457>

出版情報 : 文献探究. 17, pp. 52-55, 1986-03-20. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

細井広沢の竹枝

宮崎修多

古来、竹枝に「水辺」は付きものであった。朗州に浪々の身となつた劉夢得は勿論、楊鉄崖の西湖竹枝から、吾が国の低南海以東の諸篇には、河辺、海浜、湖水、堤上等、描出されているものが多く、劉禹錫の矢志はそのまゝ、屈平の影、さらに逝く者は斯の如きか夫とつぶやいた孔夫子の種顔に連なるのであろうか。とはいつても禹錫のむかしは別として、以後の竹枝詞の教々に迄絶望のかげりが残っていたわけでは無い。民謡のもつらうらかな調子は、竹枝、女児、の懸声に合わせてどこまでも各気であつた。ゆくものはかくのごとき歎みだ川昼夜をすてぬ猪牙とやねぶね。千紅万紫、いつしかわが国において、狭斜の巻をうたいこむ風俗詩の代名詞となり、さらに幕末の漢文体風俗誌の原型となつていつた経緯については、揖斐高氏前田愛氏の詳しい御指摘がすでにある。「江湖詩社と遊里詞」と因語と国文学昭和四九年三月・五月。「竹枝の時代」日本思想史No 21。「成高柳北」朝日新聞社。

それにしても、護國派の詩人達の代となつて、彼らがいくつ都會の繁華を不入りな表現で歌うことを好んだとはいへ、鄙かた俚諷の器を以て都市の男女の艶麗な交情や遊興の態を盛り込んだのは、皮肉といへば皮肉であつた。服部南郭や安達清河の「潮来詞」などという例外はあるものの、一時竹枝は江戸後期に至るまで本来の鄙ぶりを忘れたかに見える。本場中国でも竹枝が民歌風を脱し都會的色彩を帯びるのは、清和も嘉慶年間の初期、楊米人の都門竹枝詞がらいかうではあるまいか。日本でいへば寛政頃にあたる。即ち筆者は

竹枝が都會を舞台とするという。云つてみれば二律背反的な宮崎がわが国ではいかなる事情で早く可なりと普遍化していつたのか、という疑問を禁じえないのである。それかうすれば紀州和歌浦を舞台にした南海の「江南歌」は本来的竹枝の性格に通うものがあつたわけだが、南郭の「墨水詞」「竹枝詞」より以前の、都市を材にとつた竹枝、しかもはつまり「竹枝」と銘記してある例が、こゝには是非とも欲しい。たゞしその本がなかな不見あたらぬ事は揖斐氏の論文等でも分かる通り、中期以後の盛行と考え合わせると少し寂しい。あるいは護國以前には、風色を詠み込む最も常識的方法として、八景詩・十二景詩等というものがあつて、詩と樂府という詩体の違いこそあれこれが後の竹枝に歌われる如き題材を嵌め込む場であつたか。早く羅山、昌三らの江戸八景・十景詩が「杖聲名勝詩集」等に見られるが、護國派拍頭前夜ともいえる元禄期に至つても例えは風浪歌人仲村信斎の「霞洞集」(元禄四年自身刊)巻之二に収まる所のものがあり、また八景と題されてこそないが同じく信斎の「風浪集」(貞享元年刊)中巻に、府城朝雨、玉川春漲、平田落鴈、芝浦帰帆、上野春遊、隈田納涼、国野秋月、又橋風雪なる八景詩様の作もある。勿論それらに後代の竹枝の持つ心理や意趣のこまやかなゆらめきは望むべくもないが、景物を客観化して淡々と描くに終始するそれらでも、當時としては読む者をして後の竹枝が与えたと同じくパノラミックな感あらしめたことであろう。

狹生祖孫と席を同じうして將軍細吉に軽書を誦じた志村揚州は、その仲村信斎の弟子であつたことが森鏡三氏の紹介される細井広沢の隨筆「続八八録」に見える。著作集第四巻二五頁、広沢とも知己であり、祖孫、揚州、広沢がうろ揃つて柳沢家における將軍の催事に顔を見せる事は、他の記録類でもしばしば見かける所である。その細井広沢に「武江竹枝歌」なる作があつた事については従来言い及

はれたのを聞かない。九州大学附属図書館には、故石崎又造氏旧蔵書の一部が石崎又造として保管されているが、たまたま筆者はその中の石崎氏自身によるペン書きの写しによってこの「武江竹枝歌」の存在を知り身を留めた。原本は東京大学史料編纂所蔵の卷子本一巻。本紙の寸法は縦二八・五釐、横一三・〇釐で後人の装訂なから本文は紛れもなく細井広沢自身である。隈田川周辺を描いたこの「水辺」の竹枝にもって、南郭以前の江戸竹枝さもう一つ加えたことか下まると、幸い史料編纂所から翻字について快諾を頂いた。石崎氏の学思と共に深謝し奉り、次に全文を書き写ししてみる。なほべく訂正跡や見せ消すもそのまゝにしておいた。

○
武江竹枝歌十一首 有序

廣澤知慎。嘗被放江濱。與^{（マ）}錮高錫誦夜郎似。則似。然其才名相遠。何啻天壤乎。可勝嘆哉。時欲武江竹枝曲。然胸無古意。口無新調。亦可勝嘆哉。十年之後。為詞友逆前事。友曰。子試作之。余試知之。慎曰。諾。一日間暇。漫搦十一首。既成而自誦之。報然曰。持之示人。不可也。不示失信。不可也。調卑如是。才劣如是。而髮種種。眼矇矇。自非再生。詎以吐氣於文壇之間。可勝嘆哉。

寶永庚寅暮春

廣澤藤知慎書

(細部印)(弓馬餘興)

其一 迹斯地名勝天下第一。而不可無竹枝曲之意。

八州流水落長江 各尽雲夢不厭多
半夜東西南北客 推蓬聽我竹枝歌

其二 迹三又橋。及口口之遠觀。
(音橋カ)

東岸西岸垂柳風 上流下流大橋虹
半醒半醉任帆去 乍頭乍隱琉璃宮

其三 迹潮汐湖川流之候。及月夜之奇。

十里潮聲浪素濤 時休短棹代長篙
捨懸席香然去 欵乃一聲寒月高

其四 迹遊俠少年會花之態。而寓戒警之意。

一葉舟中無限怨 平康閨道在江干
武陵城上半輪月 合有閨人鼓枕看

其五 迹船中遠客之思。

江頭千里萬里船 客夢蕭蕭竟又眠
雙燕飛來止橋上 短書在袖幾時傳

其六 迹美魚蟹之富。兼說遊治之逸興。

連宵漁火滿巨川 今日銀鱸膾可鮮
對局少年狂且笑 當壚春女倦多眠

其七 迹蟹烟之曲。渡口之噪。翻用在中將之事。

陶龜烟起去雁驚 峯棹鐘起渡人爭
皇都遊客多相問 舟子能語白鳥名

其八 迹金龍山觀音殿。及林蔽之景象。

楊柳如松落、松間湧蘭天浮圓
滿林鶴鷺三竿日 相喚相呼下綠無

其九 迹秦平風化。士女知樂之遊。

滿川風雨鎖紅碑 雨歇風休又上舟
歌遠有情無情曲 女郎鬪草立芳洲

其十 迹江畔居民。夫妻生業之艱。

翁賣鱖魚造賣餅 水南水北少相逢
遊人散尽回櫓去 海福樓頭五夜鐘

其十一 迹東西二嶽。鎮大郡之美。兼頌茶鹿樂斯土之盛。

玉妃眉拂筑波嶺 白帝簪投富士巖
少婦不知天府樂 風帆日望郎還

今日詣華堂得拜 萱闈認靴幸甚但見麟見

未屬平安令人恐怖不止不知今得藥石之力否

竹枝俚語燈下自書小齋無風無蚊不得正書

不罪維新得賜 高知非特小弟之幸 柳亦

武江之幸也

上

仲夏念六

細知慎拜

印 (細知慎)

篠老社兄

文凡

○

宝永庚寅は七年である。南海の「江南歌」といづれが早いかは定かでない。「江浜に放たれ」というのは、元禄十五年、例の獅子王の剣の一件で柳沢家を致仕し、深川に隠れた事を指す。已れを劉錫と重ね合わせてみたまではないが、その当座は「胸に古意無く口に新調無し」であつたというのが面白い。三村清三郎の「近世能書伝」に拠れば、この詞を作つた宝永七年には、既に宅を本町に徙して数年を経ている。即ちこの竹枝は、失意の傷跡を生々しい當時のもの才力たのてはなくいわは往事追懐の作物であつた。故に心の平静を取り戻している。「十年之後」にあつて、句中に挫折感や憤懣がそのまま顕現しよう筈もない。たゞその口調は彼土の竹枝詞の口吻を真似ようとはしており、高錫や西湖竹枝等から借りた表現を容易に指摘しうる。例えば竹枝は俗謡であるから「橋東橋西好楊柳人來人去唱歌行」「少時東去復西來」「東辺日出西辺雨 道是無情還有情」(以上、劉錫竹枝)「勸僕莫上南高峯 勸僕莫上北高峯 南高峯雲北高雨 雲雨相催惹殺僕」(西湖竹枝、楊維禎)「即身輕似江上蓬 昨日南風今北風 妾身重似七宝塔 南高峯対北高峯」(西湖竹枝、賈策)等々リズムミカルな声調を意圖した同字反覆による対比表現を身上とするが、同様の措辞がこゝろにも見える。他に「常盤」「楊柳」「日三竿」等の文字も竹枝に頻出のもので、この時期、祖傳の古文律鼓吹の時期にまだ及ばずとも、心ある詩人の一部はすでに「擬古」を實踐していたという事でもあろうか。しかし何といつても模倣の域を脱し切っていないのは、後の後園派とその流亜の竹枝にみられた如くで、割注の部分と相俟つて十一首が江戸の竹枝たりえているのであつた。但し其二其六其七其十など、大

川端ならずはの風物も折り込まれる。単なるパッチワークに終らすまいとする所が広沢の面目であらう。

惜しむらくは、広沢が唱知を求めた「篠老社兄」が今一つ明らかならず事。宝永度に於いて篠崎東海を老社兄と稱するに適當か否か。亦は實際の創作の時点と、浄書して相手に送つた時点とをかなり隔たつてゐる可能性もある。かつて樋口李雄氏が「典籍」誌第十五冊上で紹介された広沢の詩稿は宝永元年以前までの詩が収まらずし、それごとを檢すれば何れも分るかも知れぬがその暇もない。又其二の「琉璃宮」其十の「海福棒」が何をさすやうか等と、筆者には解せぬ甚だ多い。合せて大方の御宗教を賜わり度く思う。

序文にあつた様に、広沢は深川八幡前に隠栖し大川の流水に親しんだ日々を、天地程の遠いがあるとしながらも劉錫の流瀟の日々に重ねた。けれど「水辺」は詩人達にとつて自嘲と慰安の場であつたと共に、都鄙を問はず、辺陬の地に擬せられ易かつたのであらう。大郡江戸にあつても隈田川の流れば、屈原や高錫を容易に反芻できる。「鄙」の風致であつた。故に竹枝を、単にその背景となつた土地の地名だけで都会風と鄙ぶりに分類してみるなほというのは、的は外れのさかしらうか。ともあれ竹枝には「水辺」が付く物である。失意や悔恨は無くとも、竹枝詞というかたうともつて愚所周辺の遊惰の様、艶冶な風情をあらゆるまに描くとき、高錫や屈原の泣き笑いの映つた「水辺」という意匠なくしては、漢詩人達とうも気が引けたといふことかも知れない。

九州大学大学院博士課程

武江竹枝歌 一首 有

廣澤如慎。嘗被放江濱。與錫馬錫詢
如仰。如仰。然其才名相遠。何當天壤
乎。勝嘆我。時欲武江竹枝曲。然胸意古
意。口舌將凋。之。勝草我。十年之後。為詞
友述前事。爰曰。子試作之。余試和之。慎曰。
汪。一日聞。慢構十一首。既成而自誦之。
報然曰。特示人。不可也。不示失信。不可也。調
早。大是。才劣如是。為發。後。自非再
生。復以吐氣。未女。檀之。可勝。嘆。我。
寶永庚寅暮春。廣澤藤知慎書。

其一述斯公也。勝天下第一。而不可言。并枝曲之素。

八州亦為首長河。吞我。不厭。為。半。灰。東。西。有
心。空。推。道。聽。我。并。枝。歌。

其二述三大格。及。各。橋。之。古。歌。

東岸西岸垂柳風。上流下流大橋虹。半醒半醉
任帆去。如。願。名。隱。依。臨。宮。

其三述深津。瀨。川。流。之。恨。及。月。夜。之。奇。

十里潮岸。臨。素。滌。時。休。能。掉。代。長。竿。檢。寫。句
席。者。如。去。秋。乃。一。年。守。月。考。

其四述。遊。俠。少。年。會。之。熱。不。當。我。之。衰。

一葉舟中。喜。如。怒。平。康。國。道。在。江。干。武。傳。傳。上。世。